

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 堀内俊郎<sup>ほりうちとしお</sup>

インド大乘仏教の思想史は、義浄(635-713)も『南海寄帰内法伝』巻一に伝えるように、中観と瑜伽(行)の両学派がその主流を形成した。本論文は、その中の瑜伽行派の学説を体系化したヴァスバンドゥ(世親 400-480 頃)による大乘仏説論を題目とする。ヴァスバンドゥが大乘仏説論を直接に論じるのは、経典解釈の方法を論じた『釈軌論』*Vyākhyāyukti* 第4章においてである。チベット語訳のみに伝わる同論の研究は山口益が先鞭をつけ、その後、本庄、李、Skillingらがそれぞれに研究成果を公にしてきた。本論文は、これらの先行研究を批判的に踏まえたうえで、本格的な解明が俟たれていた『釈軌論』第4章を中心に、ヴァスバンドゥの大乘仏説論(大乘経典およびその諸説はブッダの教説に他ならないとする論)を多角的な視点に立って考察する。

第1章『釈軌論』を中心とした世親研究概観では、『釈軌論』研究史、同論の全体構成、『俱舍論』から『釈軌論』をへて『唯識三十頌』にいたるヴァスバンドゥの思想発展、さらには注釈者グナマティ(徳慧 460-540 頃)の唯識説の特色を論じる。つづく第2章『釈軌論』における大乘仏説論 および第3章『釈軌論』の「法」解釈は本論文の中心となる章で、堀内氏は、大乘経典は仏説であるか否かをめぐる仏弟子(声聞<sup>しやうもん</sup>)とヴァスバンドゥとの問答という形式をもつ本章の文脈に即して当該のテーマを詳論する。

『釈軌論』によれば、一切法は固有の本質をもたないと語る『般若経』の説は未了義の、つまり真意が完全に明かされていない教説であり、同説の真意はことばによっては意を尽くせない諸法とそれらを通底する道理(法性<sup>ほっしやう</sup>)が実在すると主張する点にこそあるという。そして、このことを直接に説いた了義の経典が『解深密経』等<sup>げじんみつきやう</sup>の大乘経典であると意味づける。また、これらの了義の経典は、対論者である声聞にとっては隠没<sup>おんもつ</sup>し知見されていないとしても、ヴァスバンドゥ等の大乘論者にはブッダの教説として現に伝承されていること、また隠没については、伝統教説も不完全であり、すでにその一部が隠没している事実を示す経典も少なくないことを具体的に指摘する。本論文は、このような『釈軌論』の論法を論全体の構成とともに、他の関連論書における論法との比較考察をもとに明らかにする。その中でまた、八万四千の法蘊<sup>うん</sup>のチベット語訳表記に関する従来<sup>しやうらい</sup>の解釈を正し、隠没を示唆する十六の経典の多くを比定するなど、注目すべき成果をもたらしている。

このように、本論文は『釈軌論』第4章を中心とするヴァスバンドゥの大乘仏説論の詳細を複数の視点に立って解明し、今後のヴァスバンドゥ研究ならびにインドにおける大乘仏説・非仏説論争史研究にとってもきわめて意義のある業績として高く評価することができる。文章構成や、一部のテキスト解釈および訳語の統一等に関していくつかの問題は残されているが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。